

な村落として機能していた可能性がますます強まり、何らかの官衙施設の存在も想定されるようになった。

なお(1)(2)ともその釈文・内容などについて、国立歴史民俗博物館の平川南氏よりご教示を得た。

9 関係文献

①伊興遺跡調査会『伊興遺跡―下水道敷設工事に伴う発掘調査』(一九九七年)

②酒井清治・松本晃「東京都足立区伊興遺跡出土の陶質土器について」(『韓式土器研究』VI 一九九六年)

(佐々木彰)



(1)裏

東京・丸の内三丁目遺跡

- 1 所在地 東京都千代田区丸の内三丁目
- 2 調査期間 一九九二年(平4)一月～一〇月
- 3 発掘機関 (財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 西脇俊郎・上條朝宏・栗城譲一・竹尾 進・武笠 多恵子・岩橋陽一・小林 裕
- 5 遺跡の種類 武家屋敷跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(東京東北部・東京東南部)

調査地は丁R有楽町駅北西側の、旧都庁跡地(現在の東京国際フォーラム)に位置する。

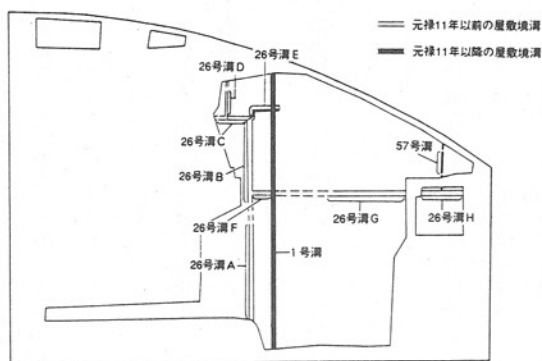
調査地周辺は、江戸時代初めに日比谷入江を埋立てた地域である。慶長一三年(一六〇八)頃の様子を描いたとされる『慶長江戸絵図』によると、当地域には山内対馬守・彦坂小刑部・森(毛利)伊予守・福島掃

部・竹中伊豆・青山五郎八が屋敷を構えていた。その後、明暦の大火（一六五七）などの火事により、盛土・整地が行なわれ、幾度かの屋敷替えを経て、元禄十一年（一六九八）の大火後、調査地北側が土佐高知藩二四万石松平（山内）土佐守の上屋敷、南側が阿波徳島藩二五万石松平（蜂須賀）阿波守の上屋敷となり幕末に至る。

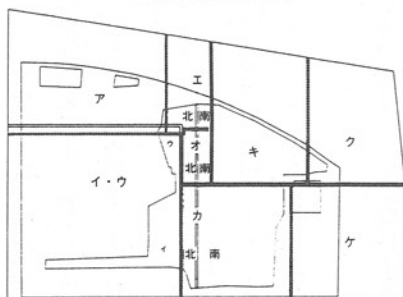
本調査地域で、元禄大火以前に屋敷を構えた大名・旗本は、幕府代官頭・江戸町代官（奉行）彦坂小刑部元正、大和松山藩三万石福島掃部頭高晴（福島正則の弟）、豊後府内藩竹中伊豆守、竹中筑後守重信（豊後府内藩主の弟）、書院番士青山五郎八、上総佐貫藩一万五千石松平出雲守、豊後佐伯藩二万石毛利市三郎、丹波柏原藩三万六千石織田刑部、出羽左沢藩一万二千石酒井右近、伊勢長島七千石後に三河刈谷藩一万一千石松平能登守、旗本三千石神尾宮内、甲斐徳美藩一万二千石伊丹藏人、中村藩三万石（土佐高知藩支藩）山内修理（土佐山内忠義の二男）、旗本五千石坂部三十郎、大和新庄藩一万石永井靱負、三河岡崎藩五万石水野右衛門、旗本一千石荒川土佐守、小田原藩一万三千石大久保安芸守、旗本松平伊予守である。

検出された遺構は、石垣溝（屋敷境）・溝・井戸・木樋・竹樋・地下室・土坑・瓦溜・埋桶・埋甕・木組遺構・瓦組遺構・石組遺構・建物跡など多種にわたる。遺構は屋敷の配置・整地層中の焼土層及び出土遺物などから、元禄十一年以前とそれ以降の二時期に分けられる。元禄十一年以降の遺構は、旧都庁舎の建物により上部が破壊

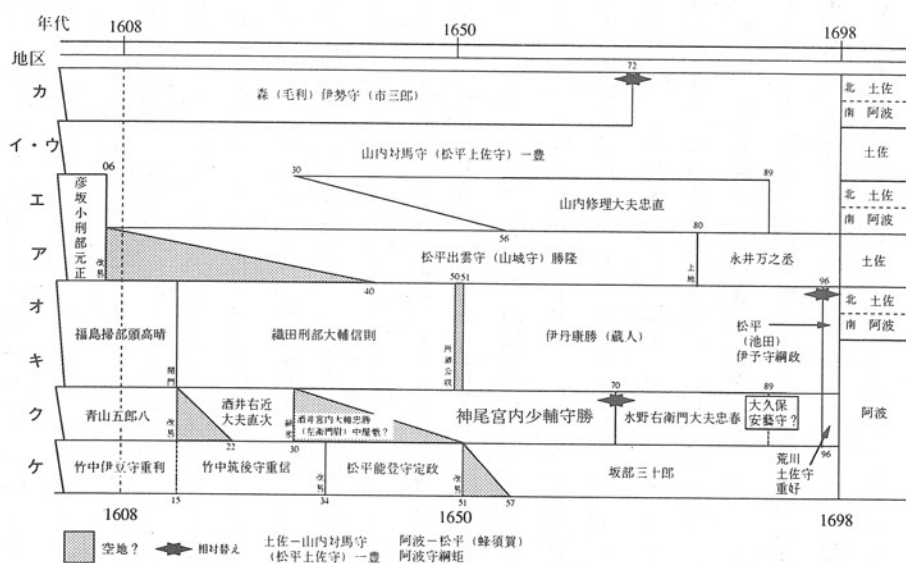
されており、山内・蜂須賀両家の屋敷境である石垣溝・井戸・木樋など一部を除き極めて遺存状態が悪い。元禄十一年以前の遺構は、盛土・整地層の下部から検出されたため比較的良好な遺存状態である。整地層中からは、明暦の大火・元禄十一年の大火に伴う焼土層や元禄十一年以前の屋敷境である石垣溝・土坑・木組遺構・瓦組遺構・石組遺構・建物跡などが検出されている。この石垣溝は、『慶長江戸絵図』の屋敷割りとはほぼ一致するものである。



屋敷境溝位置図



屋敷割り復元図



調査区域周辺の屋敷割りと居住者の変遷

遺物は、調査地が低地に位置することから、陶磁器・土器・金属製品などのほか、木簡・人形・下駄などの木製品や漆碗などの漆製品などが多量に出土した。木簡は、桶や曲物の蓋・将棋駒などを含めて、計一八七点ある。また、木製品以外にも陶器・磁器・土器に墨書したものが一五五点出土している。また、遺物以外で地下室・木樋・井戸桶などに、墨書しているものもある。

木簡は、元禄一一年以降の遺構で一・二号溝、元禄一一年以前の遺構で二六号溝G・H、二八号溝、四一・四八・四九・五一・五二・六三・六八・七八・八二・八九・九〇・九一号土坑から出土している。

一号溝は、山内・蜂須賀両家の屋敷境で元禄一一年以降幕末まで利用されていた石垣溝である。一四点出土。

二号溝は、山内家の屋敷内の溝である。一点出土。

二六号溝G・Hは、元禄一一年以前の屋敷境の石垣溝である。Gはカとキの境、Hはオとキ・クの境である。G・Hともに三点出土。

二八号溝は、ウ地区(山内家の屋敷)から検出された木組溝である。一点出土。

四八・四九・五一・五二・六八・七八・八九・九〇・九一号土坑は、カ地区の最下層(毛利家の屋敷)から検出された土坑である。五二号土坑は規模が大きく、他の土坑とは異なり周囲に一部杭列が認められることから池であった可能性も考えられる。一点出土。

四九号土坑は、藩主毛利高成の戒名(四)や人名が記された木簡が二〇点出土しており、法要などに使用されたあと廃棄された土坑と考えられる。その他の土坑は、ゴミ穴と考えられる。四八・五一・六八・八九・九〇・九一号土坑が各一点、七八号土坑が二点出土。

四一号土坑は、キ地区から検出された方形の土坑である。土坑内からは、口縁部を上にし重ねられた多量の土器皿・炭化した麻の幹のような植物の茎と、覆土下層から呪符木簡一二点が出土した(46・57)。土坑の壁面等には熱を受けた痕跡は認められないことから、呪符木簡は、屋敷の地相や家相・魔除け・災害除け・方違えなどに土器皿・麻の幹とともに使用された後、埋納されたものと考えられる。

六三号土坑は、ア地区から検出された土坑である。一点出土。八二号土坑は、ク地区から検出された土坑である。一点出土。

8 木簡の釈文・内容

一号溝

- (1) ・「。塩川九右衛門(印)
八枚之内但式枚」
・「万治元年
。女泊札
戌」

90×40×8 011

(2) ・「遠江表

。御免 鷺塚村七人
御門御守□様

・「高□□

。□□
申六月ヨリ

104×74×6 011

(3)

・「釜跡
。木札 伝内」

・「釜跡
。木札 伝内」

78×22×7 011

(4)

・「御門御番頭様御中
。御門出札扣(押印)
□屋□兵衛

・「御門出□
塩川九郎兵衛

121×65×8 022

(5)

・「論人方
南十七組様

・「論人□□
南□□□様
[十七組カ]

86×29×1 011

(6) ・「七夕」

・「廿六内
土州一」

32×21×6 021

(7) ・「辺半右衛門」

・「□□□」

55×26×6 011

(8) ・「〔紀カ〕岡上村佐右衛門」

・「□□
□四斗入」

173×25×7 011

(9) ・「上御屋敷〔御内用方カ〕岡本弥平太殿同唯七江戸衣類入」

・「上御屋敷御内用方岡本弥平太殿同唯七衣類入」

法量不明 011

二号溝

(10) ・「〔願カ〕□□御内御門制入□」

・「○九月□□七
拾八枚之内」

90×56×6 011

二八号溝

(11) ・「松平土佐守様□
〔記号〕〔カ〕○箱一荷物」

・「江戸上やしき江
〔記号〕〔カ〕○〔百之丞カ〕焚包箱木門品之助」

177×39×5 011

二六号溝G

(12) ・「下村□四郎様 弥三右衛門」

・「長物耳桶 土州浦戸」

152×25×4 011

二六号溝H

(13) 「〈礼銭拾五貫文 川本差右衛門」

275×25×6 033

四八号土坑

(14) 「為処得□究意減」

119×27×1 011

四九号土坑

(15) 「天折日空榮大禪定門様」

155×30×1 051

(16)	「性譽折忌大禪定門様」	161×30×2	051	(25)	「おち殿 ち、殿 なわ殿」	150×27×2	051
(17)	「喜獄妙歆大姉様」	162×27×2	051	(26)	おむつ おつま 清かん」	(156)×26×2	051
(18)	「やひやうへ おはる むめ」	148×27×1	051	(27)	「えしん殿 上しん殿 おひさ」	132×27×2	051
(19)	ふけつ ふく」	(129)×26×1	059	(28)	「ち、殿 は、殿」	153×24×2	051
(20)	「□は 三かいはんりん かかんみん」	144×32×2	051	(29)	「せうさい殿」	154×26×2	051
(21)	「どうせう殿」	(136)×31×2	019	(30)	「藤五郎 おねい 百助様」	144×27×2	051
(22)	「につしん ち、殿 は、殿」	145×27×2	051	(31)	「遣一えもん殿めうちん殿 あに殿」	140×26×2	051
(23)	「しゅんてい殿」	146×29×2	051	(32)	・「く小原村ふるしゆく市十郎」 ・「く末殿甚兵衛」	148×25×4	033
(24)	「とし殿 めうちう殿」	152×26×2	051	(33)	・「和積村次郎兵衛」 ・「長崎兵左衛門下」	(105)×18×4	019

(45)

「☐☐☐☐本尺四本」^{〔初力〕}

193×25×4 032

九〇号土坑

毛利市三郎様江戸屋敷内
益田高之進様 助様

248×57×8 011

(44)

寛永拾六年六月廿九日
江戸大出[○]延[□]湯川[○]秋山[□]左衛門
但壺俵二付[□]五斗入[□]長右衛門

八九号土坑

・一〇。塙類八拾三入

法量不明 〇二

(43)

毛利市三郎様御屋敷
美河空助様
日栄堂

九一号土坑

(46)

「梵字」

利（梵字）

土土土
土土土
土土土
黃黃黃

(符籙) 唵々如律令

142×41×2 011

(47)

「(キリーク)

(キヤクカ)
下

「午星」
火火火火火火
赤赤赤赤赤赤
(符籙)
唵々如律令

145×36×2 011

(48)

「ボローン」

シリール

（卯房）
≡ 木木木青 木木木青 木木木青
（符籙） 唵々如律令

144×42×2 011

(49)

「𠂔」(梵字)

（アーク）（バーク）

・「☆(五芒星) (符籙) 日日唸々如律令」

145×40×1 011

(50)

「
(ウー
ン

𠂔 (梵字)

一(子虛) 水水水黑
 三 水水水黑
 水水水黑
 水水水黑
 (符籙) 噫々如律令

147×42×1 011

(51) (カーン) (梵字)

・「西鼎」金金金白
金金金白 (符籙) 唵々如律令
144×36×3 011

(52) (梵字) (サ) (サクカ)

・「タラク」赤火 悟故十方塞唵々如律令
赤火 142×41×2 011

(53) (オン) (フツ) (梵字)

・「ウーン」青木 迷故三界城唵々如律令
青木 139×42×1 011

(54) (ウーン)(キヤ) (ラ)

・「ウーン」青木 迷故三界城唵々如律令
青木 144×43×2 011

(55) (梵字) (カーン)(マン)

・「ア」黒水 唵々如律令
黒水 142×43×1 011

(56) (ウーン) (梵字) (梵字)

・「キリク」白金 本元東西唵々如律令
白金 146×41×3 011

(57) (マ) (バン) (ウーン)

・「黄」黄土 (符籙) 唵々如律令
黄土 143×40×2 011

六三号土坑

(58) 「。池田藤右衛門

・「。池田藤右衛門 (96)×21×5 019

八二号土坑

(59) 「。酢樽」

・「。酢樽」 130×15×4 032

一括

(60) 「。西の御くら下」 (表裏刻書)

・「。御くら」 72×23×5 011

(61) 「。サ五分口

・「。サ朱一六文」

・「。金壹両」 131×33×9 011

- (62) ・「^{〔織カ〕} 応照院様御[□]之[□]目取紙八拾七束巻ニリニメ[□]」
 「^{〔久らんカ〕} 毛利市三郎[□]紙とうかん[□]酒田太郎[□]」
 「^{〔並〕} 河[□]並[□]」
 (63) ・「^{〔毛利カ〕} 於江戸ニ[□]」
 「^{〔毛利市カ〕} 毛利市[□]」
 (64) ・「^{〔彦カ〕} 於江戸ニ毛利市三郎内[□]」
 「^{〔彦カ〕} 稲田[□]長崎道兵衛様[□]」
 「^{〔彦カ〕} 庄[□]衛門[□]」
 ・「^{〔彦カ〕} 式月廿三日江戸大名町筋[□]」
 「^{〔彦カ〕} 龍冥大定[□]内八分[□]之内[□]」
 「^{〔彦カ〕} 五月廿日[□]」
 (65) ・「^{〔彦カ〕} 長崎甚右衛門[□]」
 「^{〔彦カ〕} (花押) (印) [□]」
 (66) ・「^{〔彦カ〕} 松平阿波内[□]」
 「^{〔彦カ〕} 藤田貞賢[□]」
 ・「^{〔彦カ〕} 松平阿波内[□]」
 「^{〔彦カ〕} 藤田貞賢[□]」
 ・「^{〔彦カ〕} 松平阿波内[□]」
 「^{〔彦カ〕} 藤田貞賢[□]」

260×70×10 011

71×69×11 021

78×29×5 021

261×64×11 011

260×62×7 011

- (67) ・「^{〔彦カ〕} 毛利市三郎様御やしき御賄様[□]」
 「^{〔彦カ〕} 味五介[□]屋[□]」
 「^{〔彦カ〕} 毛利[□]」
 (68) ・「^{〔彦カ〕} 森市三郎様[□]」
 「^{〔彦カ〕} 燵ふり柿 斎藤権右衛門[□]」
 「^{〔彦カ〕} 燵ふり柿 斎藤権右衛門[□]」
 (69) ・「^{〔彦カ〕} 久助殿大喜兵衛[□]」
 「^{〔彦カ〕} 久助殿大喜兵衛[□]」
 (37) については、同様のものがもう一点出土している(長さ一六〇mm幅三六mm厚さ六mm、〇三二型式)。(39)(60)は小判型の形状で、刻書が施されている。
 木簡の釈文については、報告書作成時に青山学院大学大学院生(当時)岩下哲典氏が担当したものを引用させていただいた。
 9 関係文献
 東京都埋蔵文化財センター『丸の内三丁目遺跡』(一九九四年)
 (小林 裕)

108×29×3 032

206×26×5 032

235×40×6 032